慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	共同研究「太平洋戦争と慶應義塾」をめぐって
Sub Title	
Author	白井, 厚(Shirai, Atsushi)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1992
Jtitle	近代日本研究 Vol.9, (1992.) ,p.201- 240
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19920000-0201

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共同研究「太平洋戦争と慶應義塾」をめぐって

白井　厚

（社）日本作詩家協会会員
山崎　有道
（昭和二四年経済学部卒）

みんないい奴だった

若い人らにゃわからんだろうな
四十五年も前の話さ

多ぜいの学生たちが
戦場に出ていった
読みさしの本にしおりを挟んだままで

身体の弱い者も
母ひとり子ひとりの者も

ひとり子と別れる最後の夜
お国の為とはいいながら
こんな形でわが子とはなれるなんて
ひ弱なお前をこの日まで
育てた苦労が口惜しい
母親は本音と共に
堪えていた涙をほとばしらせ
枕を叩いて泣いた　それでも
それでも　美しい日本を守る為
出ていったのだ

恋人のいる者もいたさ
お互いに泣き顔を懸命に
こらえて　こらえて別れた
そして

彼等の多くは再び帰らなかった

今　若い人らは戦争も貧乏も知らない
戦に散った者も今の日本を知らない
若者よ　自由と繁栄の美酒に酔うもよい
だがむかし君らの今日の為に
潔く死んでいった先輩たちがいた事を
忘れないでほしい
みんなみんないい奴だったのだ

若い人らにゃわからんだろうねえ
四十五年も前の話さ

（平成二年夏）

a．テーマ決定の動機と理由

この調査研究は、経済学部において私が担当している研究会（ゼミナール）において一九九一年度以降学生諸君と共に行っているものである。このテーマは、私が一九九〇年四月から一年間オクスフォード大学に Nissan Institute of Japanese Studies の Visiting Fellow として招かれていた時に考えた。

その動機はいくつかある。第一には私の研究会が先にまとめた『慶応義塾消費組合史』（慶應通信、一九九一年）の実績[1]であって、オクスフォードでその校正刷りを点検しながら、学生がこれだけの成果を生み出せるのだから、帰国後の研究会でも学生の力を発揮しうるようなテーマを、と企画した。学生は三年と四年の二年間研究会にいるのだから、これまで誰も手をつけず、しかも学生の手で事実を大量に集めることができる対象が効果的である。

第二に、戦争の持つ歴史的重要性の認識である。日本では戦後は戦争に懲りたため、戦争を嫌い、戦争を研究対象とすることも避ける風潮がある。軍事史、戦争史などは防衛庁でやるもの位に考えられた。しかしイギリスでは、大学で戦争が研究[2]され講義されている。イギリスの歴史はそのかなりな部分が戦争史なのだから、歴史の研究が軍事史を含むことは当然なのである。しかも、歴史に及ぼす戦争の影響はとてつもなく大きい。産業も技術もイデオロギィも学問も、いや生活自体が戦争によって大きく変る。戦争の是非を越えてその研究は重要であり、平和を守るためにも戦争研究は不可欠である。大学で戦争史は重要なテーマであって、晩餐のハイ・テイブルにおいてもよく話題になり、軍事戦略の専門研究者を前にして私はささやかな常識しか語れない無知を恥じた。

第三に、大学における戦没者記念の問題がある。欧米の大学を訪ねると、記念碑や壁面に彫られた大学関係の戦没者リストを目にすることが多い。ノブレス・オブリージュ（特権を持つ者の義務）の伝統で、大学卒業者の戦死率は一般よりも高いと言われる。しかるに日本の大学では、戦死者の氏名はおろか数さえ不明なのである。何とかせめて氏名を歴史にとどめて、若くして散った先輩たちの霊を慰めたい。特に現在の恵まれた学生諸君を見ていると、今の平和の礎となった方々の学生時代や戦争体験を記録して後世に伝えたいと考えるようになった。

このような個人的な動機とは別に、この調査研究を行う客観的な理由も大きいのであって、アンケートの依頼文を私は次のように記した。

「太平洋戦争と慶応義塾」についてのアンケートに御協力お願い

小生は経済学部において社会思想史を専攻する者ですが、現在私のゼミナールでは、「太平洋戦争と慶応義塾」をテーマに共同研究を進めております。これは、一九八八年度の共同研究「慶応義塾消費組合史」に次ぐ研究で、同封の御案内にある『慶応義塾消費組合史』のように、今回の研究も成果が挙がれば出版して広く公表したいと考えております。

このテーマを決めた理由を簡単に説明しますと、

a　開戦後半世紀になり、あの戦争の意味、実態、経験などを、特に若い世代が深く学ぶべき時である。

b　戦争体験を持つ人の数は減少し、貴重な資料は失われつつあり、今その収集と保存を計らなければ悔いを後世に残すことになる。

c　慶応義塾は二〇〇八年には大部の『百五十年史』を公刊するであろうが、戦時中の情報は少ないのでわれわれの共同研究を役立てたい。

という事であります。

われわれは、研究対象を〝太平洋戦争開戦から敗戦に至る約四年間、大学および高等部を中心とした慶応義塾における学生と教職員の生活と意識（キャンパスでの体験および入営・出征後の体験）〟に絞りました。そして書物や資料を勉強し、塾長や当時の教職員で貴重な体験を持たれる方に直接お話を伺っております。

また塾の協力を得て大規模なアンケート調査が可能になりましたので、太平洋戦争中に学生であり現在塾員課や三田会で住所が確認できる方全員にこのようなお問い合わせを出すことと致しました。このアンケートによって初めて明らかになる事実は研究にとって極めて有意義と存じますので、お手数をかけて恐縮ながら、ぜひ御返事賜わるようお願い申し上げます。

この三つの理由には多くの先輩から同感の声が寄せられ、[3] われわれの調査研究は予想以上の期待に見守られて進行することとなった。

(1) 『慶応義塾消費組合史』の世評はすでに定まったようで、学会の研究誌を含めて十指に及ぶ書評や紹介が出たし、国内の大学や図書館はもとより、アメリカの議院図書館やオクスフォード大学ボードリアン図書館からも注文が来るに至った。そのほかに佐志伝『慶應義塾続々豆百科』(福澤記念選書47、慶應義塾大学、一九九一年)などにも言及があり、全国農業協同組合中央会の「農協研究賞」候補作品にも含まれている。一九九二年には改訂二版が出た。

(2) 戦争研究(War Studies)や平和研究(Peace Studies, Bradford, Ulster)の機関があり、また防衛戦略、安全保障、国際紛争分析、戦略研究、戦争と社会変化、第二次世界大戦研究などのコースが大学や大学院に置かれている。

(3) たとえば日置剛「太平洋戦争の想い出」『塾友』一九九二年九月号。

b. 調査方法

「太平洋戦争と慶応義塾」というテーマのもとで、われわれはその対象を、前述のように〝開戦から敗戦に至る約四年間、大学および高等部を中心とした塾教職員と学生の生活と意識〟とした。対象をこのように絞ってみると、これまで公表された資料としては『慶應義塾百年史』(一九五八-六九年)中のいくつかの章位しかない。[1] 福澤研究センターには当時の写真が整理されているが、戦争中は空襲や防空活動などのため資料は乏しいとのこと

である。特に卒業生や学生が兵役について以後の調査は全くないという。

しかしこの調査研究にとって非常に幸いなことに、戦争を体験した方々が現に多勢おられて、記憶や記録によって沢山の情報を持っている。それを集めて整理すれば、それだけでも歴史への貢献になろう。できるだけ多くの情報を集めるために、われわれは次の三つを選んだ。

一、**アンケート**。昭和一七年卒業生から昭和二〇年卒業生まで、塾員課や三田会で住所がわかる方全員にアンケートを出す。

二、**オーラル・ヒストリィ**。アンケートだけではわからない点を深く知るために、当時の塾生および教職員のうち何人かに学生が直接お話を伺って、記録する。オーラル・ヒストリィ作成は私の研究会ですでに『慶応義塾消費組合史』において経験済みで、その効果は大きい。

三、**「塾員執筆太平洋戦争体験記録文リスト」作成**。塾員たちが活字にされたさまざまな記録文献を集め、そのリストをつくる。アンケートでは表せない事実や考えが、著書・雑誌論文、社内報や新聞のコラムなどに書かれているので、そのリストは、アンケートの不十分な点を補う手がかりになるだけでなく、後世の歴史研究にとっても貴重な情報源になるであろう。

当初考えた方法はこの三つだが、共同研究が進む中にこれらは若干変化した。まずアンケートについては、数千人の卒業生にアンケートを出すと郵送料だけでも尨大なものになるが、幸いにも義塾の学事振興資金と経済学部の野村投資信託記念資金から援助を得て可能になった。そして昭和二〇年卒業生までのアンケートでは不十分だから戦後の卒業生も対象にすべきだという助言を沢山戴いて、昭和二四年卒業生まで延長した。軍隊へ行った人の中にはシベリア抑留などで復員が大幅に遅れ、それから復学して卒業した人も多いからである。日中戦争中

の卒業生にも遡ってアンケートを出すべきだと言われることも多いが、これについてはまだ実行していない。

オーラル・ヒストリィに協力していただいたのは、石川塾長はじめ当時の教員と学生で、義塾の教職に就かれた石川忠雄、増井健一、神山四郎、横山寧夫、小池基之、伊東岱吉、白井浩司、三辺謙氏ら、職員を勤めた川久保、昆野和七氏ら、その他OB約一〇人、春日神社の女性神主からも戦時中の三田の状況について談話を伺った。

(1) 最大の戦災校と言われる慶應義塾であるから無理ないことではあるが、『慶應義塾百年史』にある各年度卒業生数すら正しくない。現在在学証書、成績原簿、年鑑などをもとに教務部で再調査をしてもらっているが、正確な数字を出すのは日数を要するようである。戦争末期の二年間については教職員名簿すらないので、われわれが確認を急いでいる。

c. 現代塾生の戦争認識

この共同研究には、研究会に出席している葛木能雄助手、杉本貴志日本学術振興会研究員らも助言を与えているが、主体は学部学生である。研究会の学生は太平洋戦争についてどの程度の認識を持っているのだろうか。もちろん家庭環境や読書傾向などの個人差が大きいが、調査の結果次のようなことがわかった。

小学校時代——担任の女の先生が広島での被爆を話し、強烈な印象を受けた、中沢啓治『はだしのゲン』を担任から読めと言われ原爆の恐ろしさを学んだ。広島の原爆資料館を見てショックを受けたなど、原爆について習った例が多い。中には先生が沖縄戦について話してくれたというような特殊な例もある。

中学校時代——教科書レヴェルの概略のみを教わった学生が多いが、原爆の写真集、『はだしのゲン』、早乙女勝元『東京大空襲』『南京大虐殺』などを読んで話し合ったりしている。修学旅行などで広島の原爆資料館を見た学生も多い。

高校時代――受験教育が中心となり、入試で現代史は出ないと言われて、太平洋戦争については全く学ばなかったり、ごく概略のみを習った者が多い。遠い非現実的なものに思えた、兵士や国民の状況は習わなかった、事実は教わったが心情は教わらなかったと回顧する者もいる。日本史は奈良時代まで、室町時代までというのは極端な例だが、大抵は明治維新で終り、世界史は第一次世界大戦も習っていないという。受験において数学選択のコースを目指すと、日本史も世界史も教科書をさっと読むだけとなる。

ただし受験準備がない塾内高校出身者は、戦争体験を持つ教師の詳しい体験談に驚いたり、地学の教師から日吉の地下壕の話を聞いて興味を持ったりしている。また教科書検定で中国大陸に対する「進出」か「侵略」かで国際的な議論があった直後に高校で学んだので、受験校でも「侵略」について詳しく教わった例もある。

大学時代――太平洋戦争に関連する講義を全く聞いたことがないという学生がほとんどだが、小林英夫「日本資本主義発達史」、田中明「日本近代社会経済思想史」、田代和生「歴史学」などを履修し戦争に関連した講義を聞いた学生もいる。

もちろん戦争についての知識は学校教育だけによるものではなく、肉親の話、先輩の話、読書、映画、テレビ、講演会、展示などもあるが、従軍慰安婦などが問題になっているにもかかわらず、現代の学生の戦争に関する知識は甚だ乏しい。例えば私の研究会の学生すら、戦時中の思想弾圧、学生狩り、学徒出陣、人体実験、太平洋戦争の犠牲者数などを初めて知ったという者がいる。定年制のために戦争体験を教室で語る教師は今や消滅しつつあるので、このままでは若者の戦争認識[1]はますます希薄となり、学校で日本の侵略を克明に教える東アジア、東南アジア諸国とのギャップ[2]はますます大きなものとなろう。

(1) 日吉のある教室で調査したところ、戦争中の中国人の犠牲者数、フィリピン人の犠牲者数、沖縄戦の犠牲者数、日本人全体の犠牲者数

などを答えられた学生は（もちろん諸説あるにせよ）ごく少なかった。過去の戦争に対する無知は、アジア諸国との交流を促進する場合の大きな障害となることは言うまでもない。

（2）「21世紀のアジア・太平洋と日本を考える懇談会」（宮沢首相の私的諮問機関で座長は石川塾長）は、戦後処理問題について、歴史教育を充実させるには実際の教育現場が重要で、受験対策偏重を改め歴史的事実の持つ意味を国民一人一人が考えるべきだという報告書を首相に提出した。（一九九二年一二月二五日）

d．アンケートの内容

戦争についての事実認識が乏しいから、今の学生が戦時中の日本人を理解することは、外国人を理解するように困難である。いやむしろ、事実を知ればますます不可解というべきであろう。なぜ日本軍は中国大陸の奥深くまで攻め込んだのか？　なぜその上に負けるに決まっている戦争を始めたのか？　なぜ真珠湾の奇襲攻撃などやったのか？　なぜ更に無謀な戦域拡大を行ったのか？　なぜ残虐行為を繰り返したのか？　なぜ多くの学生が特攻隊を志願したのか？　洋学の中心だった慶應義塾がなぜ簡単に米英との戦争に協力したのか？　大先輩を怒らせるかもしれぬこうした素朴な疑問に答えるには、当時の国民や学生たちの心情を理解することが必要である。

そこでアンケートでは、「太平洋戦争について当時の学生はどのように考えていたのか」「当時の学生生活はどんなだったのか」「軍隊生活はどんなだったか」という三点を柱にして、次のような問いをつくった。全部で26問という長いものである。

◎　以下の質問で，回答の例示があるものは，御自分のお考えに最も近い回答を一つだけ選んで，その数字を丸で囲んで下さい。「その他」を選んだ場合には適当な語を書いて下さい。

☆　太平洋戦争について

1．学生時代には太平洋戦争についてどのように考えていましたか？

a．アジア解放の聖戦(正義の戦い)　b．自衛のためやむをえぬ戦い　c．勝てるはずのない戦い

d．帝国主義戦争　e．その他

太平洋戦争についての考えと日中戦争についての考えが違っていた場合は，それについて簡単に御説明下さい。

2．真珠湾攻撃の報を聞いて，どのように感じましたか？

a．大感激だった　b．半信半疑だった　c．とんでもないことになったと思った

d．不意打ちは良くないと思った　e．その他

洋学と自由主義の伝統を持つ慶応の塾生として，米英と戦うことに何か矛盾を感じた方は，それについて御説明下さい。

3．大東亜共栄圏の理想についてどのように思っていましたか？

a．立派な理想だ　b．目的は良いが実現不可能　c．日本にとっては良いが他のアジア人には迷惑

d．うわべだけの理想　e．日本帝国主義の野望　f．その他

4．学生時代には，天皇についてどう思っていましたか？

a．畏　敬　　b．尊　敬　　c．親しみ　　d．無関心　　e．反　感　　f．その他

5．学生時代には，天皇は神だと信じていましたか？

a．神だと信じていた　　b．多少疑問を持っていた　　c．かなり疑問を持っていた

d．人間だと思っていた　　e．その他

6．大本営発表を信用していましたか？（卒業までの時点でお考え下さい）

a．正しいと思っていた　　b．誇張があると思っていた　　c．だんだん信用出来なくなった

d．虚偽だと思っていた　　e．その他

7．開戦時には，アメリカとイギリスについてどのように思っていましたか？

a．鬼畜米英と思っていた　　b．恐怖を感じていた　　c．裏切られたと思った　　d．よく知らなかった　　e．好感を持っていた　　f．自由主義国として尊重していた　　g．その他

8．開戦時には，ドイツとイタリアについてどのように思っていましたか？

a．尊敬していた　　b．信頼できる仲間だと思っていた　　c．よく知らなかった

d．本当は信用できないと思っていた　　e．ナチズムに脅威を感じていた　　f．その他

9．昭和二〇年八月一五日，どこで何をしていましたか？

10. 敗戦の報を聞いて，どのように思いましたか？

a．敗戦を信じられなかった　b．失望落胆した　c．自決しようと思った

d．何も考えられなかった　e．助かったと思った　f．当然の結果だと思った　g．その他

11. 戦争協力の責任上戦後数人の教授が塾を去りました。このことについて特に御意見があればお書き下さい。

☆ **学生生活について**

12. 女性との交際はありましたか？

a．まったくなかった　b．ほとんどなかった

c．あった（相手は，女子大生　近所の知り合い　店で働く女性　親戚　芸者　その他　　）

13. 学生時代の主な娯楽は何ですか？（全部の中から三つまで丸で囲んでください）

スポーツ（野球 テニス サッカー ラクビー 柔道 剣道 相撲 登山 スキー 空手 スケート その他　）

スポーツ観戦（野球　テニス　サッカー　ラグビー　柔道　剣道　相撲　その他　　）

映画　新劇　歌舞伎　新派　寄席　宝塚歌劇　オペラ　音楽鑑賞　音楽演奏　シャンソン　邦楽　読書

旅行　トランプ　ビリアード　マージャン　碁　将棋　ダンス　その他（　　）

14. アルバイトをしましたか？　した方は，その理由，職種，期間などを書いてください。

15. 太平洋戦争開始後の授業について，特に印象的な変化があれば記して下さい。

16. 教練，防空演習，報国団，服装取締，その他の戦時態勢についてどう思いましたか？

a．積極的に協力した　b．戦時だからやむをえぬと思った　c．あまり協力しなかった

d．逃避した　e．抵抗した　f．その他

17. 当時の塾内における左右の学生運動について，何かご存じのことがあれば書いて下さい。

18. 戦争に関連して特に記憶に残る教授の講義，言動，書物，講演，友人など，自由に書いて下さい。

教授の発言・行動——

友人の発言・行動——

書物や講演の影響——

19. 言論抑圧，大学の自治侵害（講義内容にたいする干渉など），学問の自由の侵害（図書館における禁書，

卒業論文のテーマ変更指示など)，警察の動きなど，気付いた点がありましたか？

☆　**軍隊生活について**

20. 幹部候補生などに志願した方で特別に理由がある場合，および軍隊に行かなかった方は，その理由を書いて下さい。

21. 軍隊での勤務について書いて下さい。(21，22，23，は軍隊に行った方への質問です。)

a．主に　①　内地勤務　　②　外地勤務（中国，フィリッピン，インドネシア，ビルマ，その他　　）

b．主に　①　前線勤務　　②　後方勤務　　③　特攻隊

c．勤務内容（　　）

22. 慶応の出身ということでどのように待遇されましたか？

a．厚遇された　　b．普　通　　c．冷遇された　　d．迫害された

a．c．d．の場合，理由は何ですか？

23. 軍隊生活の体験のうち，特に今の学生に知ってもらいたいことがあれば自由に書いて下さい。

24. 太平洋戦争の期間を通じて，肉体的・精神的に被害をお受けになった点につき書いて下さい。(教練や空襲や出征による怪我，り災，近親の不幸，官憲による取締，学問の中断，異常な青春時代の問題など)

◎ 以上，回答の例示があるものは，集計の必要上13を除いて一つだけを選んで丸で囲むようお願いします。「その他」を選んだ場合は，適当な語を書いて下さい。

25. 戦争中の学生生活や軍隊生活についてすでにお書きになっているものがあれば，その著者名（匿名や連名の場合)，タイトル，掲載誌名，掲載年月，号などを書いて下さい。できればそのコピィを送って下さい。それによって，『**太平洋戦争体験記録リスト**』を作成します。

26. 当時の塾生生活を物語る手紙，教練の記録，軍隊用品，写真などをお持ちでしたらお知らせ下さい。学生諸君は今年の秋の三田祭にこのテーマで展示を行う計画があり，これらを展示することができれば若い諸君が当時を学ぶのに効果的と思います，また，写真を出版物のなかに使わせていただく事や書簡集の出版も考えられます。

◎ われわれは，太平洋戦争中の隠された事実，忘れ去られた事実を後世に正確に伝えたいので，集計後もこのアンケートをもとに研究を続けるつもりです。上記の質問のすべてについて，回答欄のスペースが足りない場合には，適宜別の紙を用いて下さい。

このアンケートは十七年卒業以降順次発送したので二年間にわたり、その間文面を多少直したところがある。[1]

この前にはフェイス・シートの部分があり、氏名、出身都道府県、入学と卒業の年月、研究会または特に指導を受けた教授名、入学前の学校、軍歴、職歴などを記入してもらった。記名式のアンケートである。

最も詳しく回答が書かれたのは、問23「軍隊生活の体験のうち、特に今の学生に知ってもらいたいこと」であった。

(1) 一九九一年夏頃までのアンケートにおいては、問26で三田祭展示用の品物を求めたところ、認識票、遺書など多くの品が寄せられ、三田祭の展示を効果的なものとした。二四年卒業生に対しては勤労動員についての問を入れたため、一問多くなっている。

e．アンケートに対する反応

このアンケートを、挨拶文、年表、海軍の戦没者名リストなどと共にまず昭和一七年卒業生七七三人に発送してみると、回答率は約三割で、たちまち大きな反響が現れた。二六問もあるアンケートにはたしてどれだけ答えてもらえるかあやぶんだが、沢山の回答のほかに手紙を同封された方が実に多いのである。さまざまな手紙の中から一例を紹介すると、

「今回のご研究は、まことに時宜を得た有意義なものと敬服申し上げます。

実は私ども世代のものは、敗戦後復員してみると、日本のすべてが極端な自己嫌悪に陥らされて、私どもの戦場に赴いたこと自体罪悪視されるが如き風潮に慨嘆したものでした。

当時のベストセラー『聞けわだつみの声』を読んだ私の感想は、一面共鳴しながらも多くの不満を残すものでした。あの本に登場する学徒戦士よりももっと多くの学徒出陣者が、素朴な純真な心境のまま進んで祖国の

難に殉じていったのであります。これらの人々について論ぜられることが少ないのが残念だったのであります。

戦後五〇年を経て、戦争それ自体に対する考察、反省は尽くされましたが、戦争に参加した（せざるを得なかった）国民の側についての研究、特に社会の指導的地位にあった当時の学卒、学徒の幅広い意識を考える研究がなされて然るべきと考えております。

戦争酣の時、一緒に三田の門を出、帰らぬ人となった多数の学友を想い、彼らの短い生涯を意義あるものにしたいと念ずる次第です……」。（昭和一七年経済学部卒業生油田和次氏より）

これに近い内容の手紙が多いが、双手を挙げて賛成して下さる方からかなり批判的な方まで相当な幅がある。批判の点を示すと、

・過去の時点でどう考えていたかを今記すことは難しい。
・当時の心境はマルバツ式で答えるような簡単なものではない。
・設問がいささか機械的であり、意のあるところを適切に伝えられない。
・当時の状況を考えれば、設問はあまりに第三者的で当時の塾生の心情とは隔たりがありすぎる。
・戦後民主主義の悪影響を受けた企画である。
・暗い抑圧された時代と決めつけ、学生は傍観者或は批判者であるべきだと設定されているようだが、戦争である以上国のために闘うのは当然である。
・負けると知りつつ命を捨てて戦った気持は、戦後の人々には分かってもらえない。
・このアンケートを反戦のために利用するのなら書かない。

というようなものがあった。(2)『煉獄のハムレット』（文芸春秋社）を一九九一年に出した大倉雄二氏からも、〝予

科に入学した頃と学部に入った頃では答えが違う。たとえばドイツについては、始めは凄い国だと思っていたが、学年が上がるにつれて、文化を破壊する悪魔のような国だと思うようになった〃というお手紙を戴き、なるほどと感心しているうちに大倉氏の訃報に接した。お会いする機会を失ったことが悔やまれる。

確かにこの共同研究には、若干の困難がある。その第一は、戦争について最も深刻な体験をされたのは戦死者であるために、われわれはその方々からお話を伺うすべを持たないということである。クラスの二割は戦死しました、というような話を聞くたびに、われわれの心は痛む。生き残った友人、戦死者と同じような体験をされた方々のお話を通じてでも声なき声に耳を傾け、その霊を慰めたいと思う。

第二に、戦争体験が全くない若い世代に戦争のことがどこまで理解しうるかという問題がある。深刻な体験を持ちながら、現代の若者にわかる筈がないから語りたくない、という先輩、あまりにも悲しい体験で口にすることはできないという先輩、戦争体験などはすべて忘れ去るべきだという先輩、いろいろおられた。アンケートに答えていただけなかった先輩にも、そのような考えが多いことであろう。そういう気持はよくわかるし、生死をかけた戦いの問題を簡単な言葉の選択やパーセンテージによって表現することはまさに不遜な態度だということができる。しかし数千人を対象とする調査はアンケートによるしかないし、それを補うものとして塾長はじめ数十人の方にお願いしてインタヴューを行い、また「塾員執筆太平洋戦争体験記録リスト」を作成する。これらを十分活用すれば、戦中・戦後という異常な時期によって隔てられた世代間の理解もある程度可能になるのではないかと思う。

研究には困難はあるが、このようなプロジェクトはおそらく空前絶後であり、私自身が驚くほどの反響をもって迎えられた。大学は学事振興資金などによってこの史上最大規模の（？）アンケート調査を可能ならしめてく

れたし、福澤研究センター、塾員課、教務部、人事部、各年度の三田会などもさまざまな便宜をはかって下さった。アンケートの回収率は約三分の一で、激励のお電話を沢山頂戴し、貴重な写真、書物、雑誌記事のコピー、昔のクラス雑誌やゼミの名簿、遺書のコピー、軍隊用品、教員が寄せ書きした日章旗、旧軍隊関係の団体資料、徴集延期証書、召集解除証明書、「国土決戦教令」などの秘密資料、愛唱の詩などが小包や宅急便で送られてきて、学生諸君と感激を共にしている。戦後世代の人間にとっては初めて見るようなもので、これらを活用して理解を深め、できるだけ正確な調査結果を後世に残したい。

このような反響が大きい原因について考えてみると、第一には慶大の特殊な性格によるであろう。戦前からある大学の中で慶大は大きな特色を持ち、それは福澤が創立者であったこと、三田会を中心に社中協力の雰囲気が強いこと、先輩が母校を思うの念が厚いことに示される。アンケートを埋める大量の文章や手紙を読むごとに、私はそれを痛感した。

もう一つには、この調査のタイミングが良かったことによる。それは、

a．太平洋戦争から約半世紀たち、五十年目を記念する報道、テレビ、映画、行事などが多いので、過去の記憶を甦らすのに役立つ。例えば今年は学徒出陣五十年で、その記念行事のための組織が全国的に出来つつあり、われわれの調査研究を助けてくれる。

b．湾岸戦争、ＰＫＯ問題、戦時補償、従軍慰安婦問題などが続き、過去・現在の戦争を考える気運がある。

c．当時の学生は現在七〇歳前後で、戦争体験を何とか後世に伝えたいという気持を持つ先輩が多い。〝孫は戦争の話を聞いてくれない〟という言葉が象徴するように、世代間の変化―断絶が激しく、これを埋める作業に共感を寄せて下さる方が多い。

d．歴史学においても近年は社会史、地方史、学校史、生活史、自分史などについての認識が高まり、このような調査研究の意義を重視するようになった。このアンケートを契機に自伝を書き始めた先輩もいる。

e．塾の一五〇年史を書くためには今から本格的に資料を集める必要があり、特に混乱期の戦時中の資料については現時点での蒐集努力が極めて重要である。

アンケートは塾員課のコンピュータに記録してある住所録によって発送したが、その回答率は高く、また回答内容は面倒な質問にもかかわらず極めて良質である。住所不明で返送される数が多いのが難だが、逆に未着だから送れという要請、昭和一七年以前の卒業生からの問い合わせも多い。豊富な情報に満ちたアンケートの回答は、今後も太平洋戦争史研究にとって極めて貴重な資料として活用され続けるであろう。

回答と共に注文も多く、この機会に塾関係者の戦没者リスト[3]をつくるべきだという要望に応じて、現在リスト作成中である。リストとしてはすでに一九八七年の『三田評論』に昆野和七氏作成のものがあるのでこれを活用し、また堀内彦男氏（海軍第三期予備学生会、立教大学出身）が作成した海軍予備学生戦没者リストの中から慶大関係者を抽出したリストをアンケートに同封、点検を求めた。これは没年月日、戦没場所、所属その他をも記した詳しいもので、これによって友人の戦没状況がわかったと感謝の手紙を戴くこともある。

アンケートは結局昭和二四年卒業生まで発送したが、そればかりでなく、昭和二二年卒業生からは次のような別紙のアンケートを加えた。これは、われわれの調査研究はいずれ戦後にまで及ぼさなければならないが、戦後の混乱期も情報が乏しいので、今のうちにできるだけ情報を蓄積しておきたいという意図による。更にわれわれが戦争に関連するさまざまな現実の問題を議論する場合に、実際に戦争をした先輩たちはどのような考えを持っているのか、体験者の意見を重要な参考にしたいからである。

1．この「太平洋戦争と慶応義塾」という研究プロジェクトについては反響が大きく，いろいろご要望もいただいております。そこで，研究対象を戦後に拡げることを計画中です，ついては，終戦時および戦後の大学生活（復員，復学，学生や教職員の動き，授業状況，課外活動，学生運動，復興作業，施設の状況，米軍との関係，試験，卒業，経済問題，食糧問題など）について，特に御存知のこと，歴史にとどめるべき事実や資料があればお書き下さい。（『慶応義塾年表』を同封しました。）

2．私のゼーナールは今後も太平洋戦争と戦後の諸問題について論議を重ねて行きますが，戦争を実際に体験された方のお考えは特に貴重なので，次の項目のどれについてでも結構ですから，特に御意見をお持ちの方はぜひ記して下さい。（これは，現在のお考えをお願いします。）

a．日本軍の真珠湾攻撃について　　b．アメリカの原爆投下について
c．ソ連の参戦について　　d．従軍慰安婦について
e．連合軍の占領政策について　　f．民主主義への急激な転換について
g．新憲法について　　h．天皇制について
i．戦争裁判について　　j．湾岸戦争について
k．ＰＫＯについて　　l．その他

（1）手紙の一つを紹介すると，"学徒出陣者の記憶と伝承"と戦没者の「慰霊」は私たち生存者の使命と責務だと存じます。三田で学びこよなく塾を愛した学徒出陣者は遥か遠い戦地にあっても塾への思いを心中深く抱き続けていました。私たちは白井教授研究会の共同研究

「太平洋戦争と慶応義塾」のお話を承った時正に心が晴れる思いがしました。まして戦死者の方々の思いは……、その悦びは……。〃（昭和二一年経済学部卒業生松本武彦氏より）

（2）アンケート中の用語に対する批判もあった。例えば「太平洋戦争」「女性との交際」「アルバイト」などである。当時の言葉とは違うであろうが、この調査が現代の若者により、また結果は後世の人によって利用されるということで理解を得たい。「大東亜戦争」は当時の正式名称だが、これは「大東亜新秩序建設」を目的とする呼称である。

（3）戦没者リスト作成にはさまざまな問題がある。一つは時期をどう限るかで、「支那事変」中の戦没者、終戦後の死者（八月一五日以後の戦闘によるもの、シベリア抑留中の死者、復員中の死者など）をどうするか。また戦没の認定（戦死、戦病死、殉職、空襲によるもののほかに戦犯として処刑された者もあり、法務死と言われる）など難しい場合がある。混乱期には更に複雑な問題があり、軍籍（軍属も含む）にあって復員時点までに死亡した者すべてを戦没と見なさざるを得ないが、確認できない場合も多い。

また大学としては、卒業生の死亡が確認されれば「塾員名簿」から除くが、戦没かどうかの確認は難しい。学徒出陣の場合は学籍があるのだが戦没者は把握されていない。中には大学への未練を断つため自分の意志で退学して出陣、戦死した人もあるようで、個々に判断するほかない場合がある。

f．思想抑圧をめぐって

私の専門は社会思想なので、この調査研究の重点の一つを思想抑圧の問題とした。慶應義塾は、東京帝大の森戸事件（一九二〇年）、三帝大事件（京大河上肇、東大大森義太郎、九大向坂逸郎、一九二八年）、京都帝大の滝川事件（一九三三年）、東京帝大の矢内原事件（一九三七年）、第一次人民戦線事件（大森義太郎、向坂逸郎ら検挙、一九三七年）、第二次人民戦線事件（教授グループ事件、大内兵衛、有沢広巳、脇村義太郎―東京帝大、美濃部亮吉―法政大、宇野弘蔵―東北帝大ら検挙、いわゆる労農派教授グループ、一九三八年）、平賀粛学（東京大学河合栄治郎の休職、一九三九年）のような、直接大学を舞台とした弾圧を受けていない。私立大学ではなぜ弾圧された教授が少いのかは一つの問題であろう。しかし内務省警保局保安課の厳秘資料『特高月報』によると、慶大の学生では日本経済事情研究会[1]、唯物論研究会、三田新聞、文芸同好会、演劇関係の逮捕者は続出し、有罪になった者もいる。一九四二年一〇月には

塾員の組織丘友会[2]のグループが、四三年九月には教員では経済学部の豊田四郎助手が逮捕された[3]。特高警察は、共産主義、国家主義、無産政党、無政府主義運動、労働運動、農民運動、水平運動、朝鮮人、宗教運動に分けて監視し、共産主義の中に学生運動を含めていたので、マルクス主義関係の文献などには厳しい警戒の目を向けていた。アンケートでは問16に言論抑圧などの気付いた事例を挙げてもらったが、今日ではほとんど忘れられている事実が沢山報告されている。例えば昭和十七～二十二年生のアンケートからは、

学生狩り――妹と銀座を歩いていただけで築地署に一晩留置された。

下宿調査――早朝六時に突然私服の刑事が二人入って来て本棚から五、六冊の本を持ち出し、私は三田署に連行され夜八時まで特高刑事に調べられた。

マルサスの人口論をマルクスと間違えられ没収された。

資本論全巻を焼却した。

本屋――日吉駅の向う側にあった古本屋の店主（四五歳位）が禁書を売って捕まったらしく、釈放後はおびえにおびえていた。

学内――三田署の私服刑事が学生ルームへ入ってきて備え付けのノートを繰ったりして感じが悪かった。

学生ルームで山行きの相談などをしていると、隣の部屋に三田署の刑事がきて様子を伺うのはしょっちゅうだった。

福澤先生研究会の夜話集（読書会）もやめるようになった。

シュンペーター等の資本理論の金融研究会における発表会には三田署の特高が出席し聴講していたので、次第に他の方面にポイントを移し、ゴットル的流れとなってしまった。

大ホールで音楽会を開催すると上階の後席に三田署の巡査が座っていた。
演説館での弁論大会の都度、必ず特高警察二名以上の目が光っていた。
三田新聞には三田署の特高がいつもやってきていた。しまいには特高と一緒に品川に釣りに行ったりした。
配属将校など学内の軍事教練の教官が、無言の圧力になっていた。
日吉の入口で各クラスが順番に歩哨のまねごとをやらされた。私たち法学部F組はボイコットをやり、譴責処分でホールに名前を張り出された。この時は配属将校が強硬で、予科長の槙智雄先生は色々ご配慮になったと思う。

授業にて——山本教授から読書会や書籍の携帯等について注意を受けた。

研究会の議論の途中で、先生から学内での発言はそれ位にして下さいと注意された。田中教授が多少米国寄りの発言をしたところ、一学生が立ち上り〝不謹慎な発言だ〟と叫び、教授は釈明に汗を流した。
教授陣の「使命観」にもっと統一性があれば、あるいは絆があれば、抑圧に太刀打ちできたのではないか。いわゆるインテリの弱さがあったと思われる。
教授たちは将来ある塾生に間違いがあってはとの気配りだったと思うが、講義中その他で時局の批判や政府・軍部のやり方について言及することはなかったと思う。当時は書籍の題名に「社会主義」は勿論「社会」という文字がついているだけで不穏な言論と見なされる時代だった。
「社会」という言葉は使わず、同じ内容でもテーマに「厚生」という言葉を使うよう指導された。
板倉卓造教授の自宅におけるゼミナールに際し、憲兵が先生の自宅の周辺をうろついているのを度々目撃した。
英会話の米人教師が急に居なくなったり、イーストレーキ先生が警察に連行されたと聞き驚いた。

検閲――不可解だったのは、昭和一八年六月発行の『予科会誌』の創作の六ページがカットされていたこと。何が書いてあったのか。

『文明論の概略』（岩波文庫、昭和一三年四版）に削除された箇所があった。後に『岩波文庫五十年』を読み、学問の自由侵害の実態に触れた思いがした。

経済学史の本は誰の著書でも上巻のみで下巻がない。マルクスの資本論が下巻に入るからだった。

こうした情報はごく一部を紹介したに過ぎないが、今ではほとんど忘れ去られてしまった貴重なもので、大学をめぐる当時の情況を生々しく再現してくれる。もちろん百％正確な記憶とは言えないかもしれず、〝慶大に思想抑圧など全くなかった〟〝学内は自由だった〟〝特高の姿などは見たことがない〟というような回答もある。大学内の一部で行われたことは一般にはわからない場合が多いし、また当時は被害者が黙して語らないのが普通なので、官憲の思想抑圧事件は大学生活の中でかなりあったと考えるべきだろう。回答には警察の干渉を詳細に述べ、目撃者や被害者の氏名を明記しているなど確実性が高いものが多い。またインタヴューで語られたもの[4]、著書や体験文で記録されている事例も沢山ある。

（1）一九三一年三月につくられた大学公認の学生研究団体で日経と略称され、会長は永田清教授、顧問野村兼太郎、金原賢之助教授。伊東岱吉、森五郎、伊藤善助らも関係した。次第に左翼化し、平野義太郎、山田盛太郎らの書をテキストとして学習、大学の内外に組織を広げたようである。中心になった松沢元典、三宅寛らが一九三八年卒業すると竹山尚、山口侃一、内藤一雄、柴田進吉、高志信隆、高見靖、大村隆彦、亀田候治らが指導部をつくりマルクス主義の研究と普及に努めた。一九三八年一一月二九日慶大共産主義グループとして二九名が逮捕されている。

（2）一九三二年一二月の『特高月報』によると、伊藤公夫、杉浦定夫、金子照雄、田村実の四名が一九三七年九月頃慶大内に「政治研究会」をつくり、卒業後は「金曜会」を組織した。政治研究会のメンバー校條隆氏らは三八年にこの会を「三田政治学研究会」として大学に公認してもらっている。これらはマルクス主義理論の研究を続け、一九三九年には卒業生だけで交詢社内慶應倶楽部で丘友会をつくって毎

月会合を重ねた。彼らの目的はマルクス主義経営学（金融資本の具体的表現たる経営体の本質暴露）の確立だったと言われる。

（3）『特高月報』（一九四三年九月号）には、「共産主義運動の状況」中に「二、警視庁に於ける加藤定雄、鈴木庄三郎、松葉重庸外二名並に豊田四郎の検挙状況」という節があり、〝警視庁に在りては九月三〇日予て内偵中の事件を次の通検挙せり〟〝慶應大学経済学部助手豊田四郎（二八年）自宅其の他に於て学生に対し、マルクス経済学の啓蒙を為したる外満鉄内左翼分子とも関係ある模様〟と記されている。豊田の懐古によると、

〝一九四三年九月のある日の朝、私はトラック一台分の書物とともに、東調布署に拘引された。弟が夜明けに追浜に入隊してから、一時間後のことだった。この年の二月一日、日本軍はガダルカナル島から撤退し、十月二日には、学生、生徒の徴兵猶予の停止が行われた、私が「学徒出陣」のしらせを耳にしたのは、留置所のなかだった。それから一年後には、私は手錠をかけられたまま池袋駅のホームに立ったが、巣鴨拘置所の無情の塀がまるで迫るように見えた。疎開がはじまり、付近の高い家々が壊されていたためである。〟豊田四郎「歳月の霧」、I組の仲間たち編集委員会編『I組の仲間たち』私家版、一九八五年、八八ページ。

（4）たとえば一九九一年に研究会の学生が石川塾長に行ったインタヴューによれば、及川恒忠教授は、出征する学生たちを前に授業中〝この戦争は日本にとって大変な戦争だ。負けるかもしれない。その戦後を立て直すのは君たちだ。だからむやみに命を捨ててはいけない。必ず生きて帰ってこい〟と言い、特高に付きまとわれていた。後年石川氏に〝僕は特高と仲良くなっちゃってね〟と語っている。

g．三田図書館の「塾員の著作に見る太平洋戦争」展

戦争体験を全く特たない学生にとって、戦争の研究は零からの出発の時もあり、戦史の勉強、軍隊の制度の勉強から始めなければならない。体験者にとっては自明な甲幹、予備士官、短現、要務などの言葉の意味や、軍隊の内情などに通じていなければ記録を読んでも理解できない。しかし幸いにも戦争を体験ししかも元気な先輩が大勢いるので、研究会にお招きしてお話を伺った。このテーマに関連した研究会での講演者は、若い世代を含めるとこれまでのところ蔦木能雄、笠野滋、David Willams（オクスフォード大）、石弘之（朝日新聞）、山口俊彦、並木淳、西川千孝、武内建徳、戸沼得二、神代忠男、時国範夫、塚越雅則、小島清文らの方々である。そのほか石井公一郎、三雲四郎、小坂肇、里吉栄二郎、吉沢幹夫、深瀬邦雄、奥村芳太郎、桜井清香、井上敏治氏らとの懇談、

寺田貞治氏の指導による日吉地下壕見学、そしてもちろんオーラル・ヒストリィなど、多くの先輩から教えを受けている。

また学生は一九九一年および二年の三田祭に参加、九一年には昭和一七年卒業生のアンケート分析、九二年は学徒出陣についての展示を行い、多くの先輩が来られて懇談の機会を持った。

中間発表として大きな意味を持ったのは、一九九二年八月一三日から九月三〇日にかけて三田の図書館で行った「塾員の著作に見る太平洋戦争」展である。アンケート回答と共に送られてくる資料の中に予想以上に本があり、書店や図書館では見られない自費出版の本が多いので、これを図書館に展示したら戦争を考える良い資料になると考えた。特に通信部スクーリングに出席する学生および九月になって後期授業に出席する塾生を対象とした。

出品するのは塾員執筆または編集の本または雑誌に限り、図書館所蔵の本も加えた。そして情報センターが展示目録を印刷してくれるというので、本の解説付き目録とした。というのは出品した約六〇冊のうちいくつかが自費出版の本で、書店に並べるのではない本は特に象徴的な書名が多く、書名だけでは内容がわからないからである。学生が内容を読み、内容と著者についての説明、出版社、出版年、本の大きさ、ページ数などを記し、著者・編者の卒業年順に並べた。朝倉文夫の彫刻「平和来」を後ろからとった写真を表紙にあしらい、末尾には『三田評論』の「〝わだつみ像〟のオリジナル本塾図書館に寄贈」という文章を再録してもらった。

この小展示には、当時の雰囲気を伝えるために、先輩が寄贈してくれた日章旗とアメリカ軍が撤いた伝単（宣伝ビラ）、学徒出陣壮行音楽会のプログラムや多数の写真を飾った。[1] 図書館の展示であるからあくまでも本を主体にし、写真などの説明文を書かなかったが、この背景展示が人々を引きつけたことは確かである。

この展示に関連して、八月一五日の終戦記念日に「太平洋戦争下の慶應義塾――学徒出陣五〇周年を前に――」

という講演会を、白井研究会主催・通信教育部協賛で開催した。講師と演題は、「太平洋戦争下の慶應義塾大学」……白井厚、「戦争の認識と学徒兵としての観点」……西川千孝（学徒出陣五〇年会事務局）、「敗者が得たもの――学徒兵の青春――」……奥村芳太郎（元毎日新聞社出版局編集長）で、戦争体験を持った先輩（出品した本の著者を中心に約三〇名）、教職員、通信教育部学生、通学生が約一〇〇名集まり盛会であった。太平洋戦争を主題とした図書館展示が行われたことも、それに関連して終戦記念日講演会が行われたことも、これを主催したのが一ゼミナールであったことも、先輩・教職員・通学課程塾生・通信教育課程塾生が一堂に会したことも恐らく塾の歴史では初めてのことであろう。

展示した本やパンフレットは、軍隊での体験を主題とするもの、戦時中の学生生活を主な内容とするものなど多数で、市販書、私家版、生活記録、戦闘記録、遺稿集、書簡集、手記、日記、自叙伝、回想記、写真集など種類が多い。その立場も、戦意高揚を訴える小泉塾長の書から厳しい反戦の書までである。塾員の文筆活動は旺盛で、これらすべてが太平洋戦争の様々な側面や当時の心境を語り、個人的な追想を越えて貴重な史料集を形成していることに感銘を受ける。この歴史的コレクションが、この展示を期に完成に近づき、後世への大いなる遺産となることを期待したい。

これらの著作からわれわれは何を学ぶか――。私は「展示目録」のはしがきに次のように記した。

〝一つは、概説書などには現れない歴史の真実、多数の証言を発見することであろう。われわれが漠然と抱いていた固定観念は、具体的な体験と事実の記述によって正される。想像を絶した軍隊の内面、意外に自由だった学生生活、しかしその間進められた学生狩りや左翼学生逮捕の状況、ペンを剣に持ち換える複雑な心境、留学生達の困惑など、私も多くの事実をこれから学んだ。

もう一つは、例えば戦地に向かうまでの短い期間に凝集された当時の学生の勉学意欲、高い文化活動、密かに禁書を読む時の緊張感、死と対決するための厳しい修養、敗戦後の辛酸、苦悩に耐えた生命力、アジアの民衆に対する悔恨、など、現代の恵まれた青年たちとは対照的な苦難の時代に生きた人間の迫力である。特に死地に赴く特攻隊員の遺稿はあまりに痛ましく、多くの青年の命を奪った当時の国家のあり方に厳しい反省を迫る。今日の平和の礎となった先輩たちの短い人生を、われわれは決して忘れてはならないと思う。〃

この展示に添えた投書箱には、先輩、通信教育部学生、通学生などからの感想が寄せられたが、

〃父（昭和三年頃理財学科卒）も昭和一六年秋南方へ応召、二一年夏頃戻ってきました。その間母は四人の子供をかかえ、どんなに辛かったかと想像にあまりあります。〃

〃東京大空襲に会い地獄の生活を味わいました。当時噂では知っていた宣伝ビラをはじめて見て驚きました。学徒出陣の写真を見ると胸が一杯になり、二度と戦争をしてはいけないと思います。〃

〃塾員の方々の生命も戦争のために犠牲になったことを見て、何とも言えない気持になりました。……天皇陛下、日本国の命令のもとに命を失った人々、また日本人により殺された人々の魂に、安かれと祈る思いです。〃

〃当時の学生達が国のためにといって戦争に行った状況がまざまざと示されていた。彼らが命をかけて戦ったことを無駄にしてはならないと思った。〃

〃戦争に関する数多くの著作、それがすべて塾員によるもので、その数の多さには驚かされる。〃

〃現高校校舎の前で軍服を着た兵隊の写真は、慶應と戦争というものを身近に感じさせてくれた。それから陳列してある本に目を移すと、写真を見たあとなので本に対する興味はいつもよりも大きかった。〃

など、各世代からの声が記されていた。

戦争を論じた書物、そして当時用いられた実際の品、写真、それらを通じて各世代が交流し歴史の事実を学ぶなら、この展示は極めて大きな意義があったと言える。ちなみにこの展示で最も古い本は小泉信三の『戦争と道義』(一九四四年)であり、最も新しいのは松村高夫編『証言　人体実験　七三一部隊とその周辺』(一九九一年)であった。戦争の実態は道義を蹂躙していたのである。コメントの一つは言う、

〃人体実験という本があったが、現在「脳死」「尊厳死」などが言われている中で、当時人体が実験に使われていたかと思うと非常に心が痛んだ。戦争で行われた残虐行為も恐ろしいが、人間にそのような行為を平気でさせてしまうような戦争の見えない力を恐ろしく思う。忘れられつつある戦争だが、このようなことを忘れないためにも、このような展示がもっと行われ、私自身が考える機会を持つべきだと思う。〃

(1)　先輩は展示のためにいろいろな品を提供してくれただけでなく、次のアピールも寄せられた。

私どもは白井先生の研究テーマ『慶應義塾と太平洋戦争』に共感し，塾生および塾員として戦争に関わり，不幸にも戦没・物故なされた先輩・級友の軌跡を確かめ，これを悼み或いは顕彰することによって，研究テーマの一端をお手伝いしたいと願う『学徒出陣グループ』の一員であります。

今回の企画を機に，戦没・物故塾生，塾員について多くの情報をお寄せくださることを期待しております。

陸軍関係　西川千孝（21年経卒）
海軍関係　塚越雅則（21年経卒）

h．新事実の発見

アンケートの集計も終っていない途中の段階ではあるが、私はこれを始める前にはあまり知らなかったことを数多く発見することができた。そのいくつかを摘記すると、

1、軍隊体験の多様性。当然のことだが、体験者と言っても巨大な戦争のごく一部に係わったに過ぎない。陸軍か海軍か、空か地上か、北方か南方か、勝ち戦か負け戦か、前線か後方勤務か、兵科か主計か、将校か兵隊か、初期か末期か、長期か短期か、教育訓練機関の違い、配属先の違い、運の良し悪し、上官の性格の違いなど実に多様で、しかも生死をかけた限界状況の体験は自らの中で絶対化され、かつ普遍化される傾向がある。かくて塾員の中でも、〃軍隊は地獄だ〃という人から〃そんな悪い所ではない〃〃一度は経験する価値がある〃〃今の学生にも共同生活と規律遵守の体験を薦めたい〃という人までいて、簡単に判断することはできない。戦争を考察する場合には、大量のデータを集め相互に比較することが必要である。

2、教員の態度の多様性。小泉信三、武村忠雄、加田哲二らが戦争に積極的に協力し、高橋誠一郎、板倉卓造、野村兼太郎らがこれに批判的な態度をとったことは有名だが、小泉がマルクス主義者に目をかけたり右翼教員が配属将校に批判的だったり、逆に左翼教員が時流に妥協したりなど多様な例が報告されている。アンケートの問15、18にはさまざまな事例が書かれていて、その整理検討から、戦争と大学教員のあり方について深い教訓を得ることができる。

3、アンケートおよび本や体験文に書かれた内容は、もちろん筆者の立場によって大きく異なる。典型的な例が小泉塾長に対する評価で、小泉に対する全面的な尊敬・信頼――小泉の訓示のままに出征し、いわば小泉の膝下で闘ったと自認する人から、自由主義者小泉の変貌を批難する人まで幅があり、それによって事実認識が大きく異なる。開戦の日や学徒出陣壮行会で行った小泉の訓話内容[1]までが、記憶する人によって大きく違っているのである。多くの人びとの描写を集め、当時小泉が書き残したものなどと比較しながら、小泉が実際に語ったことを推定しなければならない。今回の調査の中でかなり精度が高いと思われる日記がいくつか提供されたので、こうした作業に役立つ。

4、学生数や教職員名簿などの欠如が明らかになったこと。『百年史』などの記録の誤りが発見されたこと。

5、戦争末期においても塾生はかなり自由に趣味をもって学生生活を送っていたこと。タクシーで銀座へ出たり、関西旅行、四四年春までスキーなどを楽しんだり、秋に信濃路を旅していた例がある。他方治安維持法による塾生・塾員の逮捕は相当早くから行われていた。また少数ながら米国籍の学生や留学生がいたこともわかった。その他現在の旧陸・海軍人のさまざまな組織において塾員の活動が顕著だというようなことも、一般にはあまり知られていない事実である。

以上はほんのわずかの例だが、集まった資料を集計分析し終えれば、更に重要な事実が発見されるであろう。

(1) 例えば大倉の記憶によると――〝開戦から幾日か経つと、塾長は学生を集めて講演する。「開戦の朝ほど清々しい時を私はかつて経験したことはない。聖代に生まれた者の幸せ」と言ったと記憶する人もいる。この塾長はいままで神のように持ち上げていた福澤諭吉を、「本塾の創立者、福澤先生は残念ながら自由主義者であった」とほかのときにも語っている。J・S・ミル、アダム・スミスやマルサス、リカードなどの自由主義経済学者の研究では第一人者といわれる小泉塾長の口から、そうした種類の言葉を聞くのはやりきれなかった。〟大倉雄二『煉獄のハムレット　芥川比呂志と私』(文芸春秋、一九九一年)、一一一ページ。

i．太平洋戦争と慶應義塾

国を挙げての大戦争において、慶應義塾はどのような役割を果たしたのか――もちろん国家権力の外にある私立学校として受け身の形で戦争に協力せざるを得なかったわけだが、大学においてその役割を考える場合次のような点に注目すべきであろう。

1、**特権層の形成**。現在大学・短大が約千百校あるのに比べて、当時は大学四七校（七帝大と一四の官立大学、二六の私立大学）、ほかに高等専門学校がある。現在の大学・短大の進学率約三七％に比して、当時は同一年齢層の三％しか大学へ進んでいない。従って大衆化された今日の大学生と違い、当時の大学生は特権層を形成する。特に七帝国大学と早慶両大学は代表格と見なされ、慶應義塾は財界に最も多くの人材を送り、軍部や官界へ進む人は少なかったとはいえ、学界、文壇、言論界、政界などで活躍する人も多かった。戦後A級戦犯に指名された人には、財界の池田成彬（第一次近衛内閣の蔵相兼商相。開戦時は枢密顧問官）、藤原銀次郎（米内内閣の商工大臣、小磯内閣の軍需大臣）などがある。また占領軍による公職追放指定該当者が塾評議員になりえないということになって、池田成彬、加藤武男、藤原銀次郎、大矢知昇、小林一三、千金良宗三郎、松永安左衛門、森村市左衛門など、財界の大物多数が評議員を辞任せざるを得なかった。

軍隊の中でも、職業軍人を除いて予備士官や短期現役将校中では、東京帝大、京都帝大、慶大、早大出身がかなり高い率を示した。

2、**自由主義的性格**。福澤によって創立された慶大は英米流の自由主義・洋学の中心と見なされ、戦時中も最も自由な大学だったと回想する者が多い。戦時中も自由主義的教授の授業が続いたことは特筆に値する。国家主義者や陸軍からは白眼視され、陸軍士官学校教科書『日本史教程』に福澤批判の内容が書かれ、塾出身者が職

業軍人から虐待された例も報告されている。しかし海軍は塾に好意的で、塾生も海軍志願を選ぶ傾向があった。

3、**小泉信三の役割**。小泉は一九三三年以来塾長に就任して三選され、経済学者、教育者として塾の内外に大きな影響力を持っていた。英独仏に留学し、塾長になってからハーヴァド大学創立三百年祝典に出席しアメリカを廻るなど、欧米の事情に詳しい筈だが開戦後は戦争を支持、特に一九四二年長男信吉が戦死してからは戦争協力の度を強めたと言われる。軍部の愚かな敵性スポーツ禁止などの措置には抗議しながらも、レニングラード攻防戦やクレマンソー指導下のフランス国民の例を引き、戦局不利な状況下でも塾の内外で聖戦完遂、不屈不敵の精神を叫び続けた。(1) そのため敗戦後は小泉の戦争責任を追求する声が教職員の中に広まり、大火傷もあって結局小泉は塾長の職を辞さざるを得なくなるのだが、アンケートの中には小泉に対する尊敬、支持を表明する記述がかなり多い。

小泉は小磯内閣の顧問も勤めた。

4、**福澤諭吉のナショナリズム**。日本最大の啓蒙思想家として、英米流の自由主義、個人主義、功利主義を日本に普及した福澤は半封建的軍国主義とは明らかに対立するのだが、他面では国権論者、ナショナリストであって、小泉の積極的な戦争協力は福澤の思想によって裏付けられていると言えよう。

〃天は人の上に人を造らず……〃という名句の引用をもって始まる『学問のすゝめ』（一九七二-六年）には、すでに〃国の恥辱とありては日本国中の人民一人も残らず命を棄てて国の威光を落さざるこそ一国の自由独立と申すべきなり〃〃苟も帝室の為めとあれば生命尚ほ且つ惜しむものなし〃と説かれていた。こうした文章の評価には当時の時代状況の理解が必要なことは言うまでもないが、戦時中の「忠君愛国」「滅私奉公」的スローガンは、福澤の文章中にもその類を見いだせる。だからこそ戦争末期に徳富蘇峰が「言論報国」の「蘇翁漫談」

において福澤の個人主義を非難した時、小泉は『学問のすゝめ』『文明論之概略』『通俗国権論』『時事小言』『兵論』その他多数の福澤の軍備拡張論を示して『三田新聞』において応酬した。〃これらの著作、論説、すべてを通じて終始かわることのないのは国権皇張論だった〃[2]のである。

しかも福澤は、八三年の「外交論」[3]において〃世界各国の相対峙するは禽獣相食まんとするの勢にして、食むものは文明の国人にして、食まるゝものは不文の国〃〃日本国は其食む者の列に加はりて、文明国人と共に良餌を求めん〃と西洋諸国の帝国主義的侵略を恐れ、日本の文明化によってその列に加わらんとし、『時事小言』（一八八一年）で説いた東アジア連盟の夢が破れると、八五年の「脱亜論」に至っている。欧米諸国の包囲に対する危機感、大東亜共栄圏、朝鮮・中国に対する蔑視と強硬策、主戦論、盡忠報国というような太平洋戦争の基調には、時代は違っても福澤と共通するものがあった。[4]

一九八四年には台湾と福建省の一部を日本の取り分とする清国分割地図を作成し、晩年『福翁自伝』の末尾には、〃日清戦争など官民一致の勝利、愉快ともありがたいとも言いようがない。命あればこそコンナことを見聞するのだ、前に死んだ同志の朋友が不幸だ、アア見せてやりたいと、毎度私は泣きました〃と、手放して勝利の喜びを語った。福澤は日露戦争まで生きなかったが、日清日露の勝利が日本国民を驕慢にしたことが、太平洋戦争開戦の原因の一つとしてしばしば指摘されている。もちろん福澤の国権論は太平洋戦争を始めた軍国主義とは違うが、敗戦によってデモクラート福澤の時代が到来したと簡単には言えないであろう。

敗戦後半世紀に近づいても、〃もはや戦後ではない〃どころか残虐行為の補償、従軍慰安婦問題などがますます重くわれわれにのしかかってきているが、その際福澤の「人民の移住と娼婦の出稼」『時事新報』（一八九六年一月一八日）が問題視されるということも知っておく必要がある。[5] また韓国においては、福澤批判がかなり

強いことを、認識すべきであろう。

5、**塾内の戦争協力**。小泉塾長についてはすでに触れたが、彼のあまりにも積極的な戦争協力は、彼の広い識見と自由主義的イデオロギィに必ずしもそぐわない。軍部の圧力から塾を守らなければならない塾長の立場、祖国が開戦した以上は勝たねばならぬという妥協を嫌う彼の性格、子息の戦死に対する思いなどさまざまな面を考えなければならないだろう。

塾内における軍部としては配属将校がいるが、当然大学にはそれにふさわしい軍人を送り込んでいるので、特筆すべき問題はなかったようである。教練関係のほかに軍人としては工学部長谷村豊太郎がおり、彼は東京帝大の平賀総長の推薦によって藤原工業大学の学部長に就任した。海軍造兵中将だが、学殖ある人格者で、山本五十六とも親しかったという。敗戦後教職員適格審査が始まると直ちに辞職した。

札つきの右翼としては、戦前（一九二二-三二年）だが予科で蓑田胸喜（一八九四-一九四六）が論理学を講じていた。東京帝大文学部を出、上杉慎吉の影響を受けて神がかりの日本主義を奉じ、陸軍からも資金を得、森戸事件、滝川事件、天皇機関説事件、帝大粛正運動などを起こし、戦後自殺した。戦時中かんながらの道を説いたのは、憲法の山崎又次郎、国文学の折口信夫ら。敗戦後大学の適格審査で不適確となったのは、武村忠雄（経）、小林澄兄（文）、山崎又次郎（法）、北島多一、西野忠次郎（医）、松山武秀（工）である。武村は参謀本部と関係があり、軍服で教壇に立って塾生を驚かせたが、大日本言論報國会理事のため公職追放になった加田哲二と同じく、マルクス経済学から出発した人であった。

学生の中にも、右翼団体や、軍部と結びついたスポーツ団体が若干存在した。

6、**物的被害**。塾の教職員・学生には極右極左共に少なかったので警察から受けた迫害は他の大学に比すれば特

に大きいとはいえないだろうが、建築物については戦争によって大きな被害を受けた。

三田では学徒の動員と出陣によって学生数が激減し、一九四三年文部省の指示によって教室その他が東部第六部隊、三田警察署、芝区役所、三田警防団、芝消防署、慶應出版社、台湾拓殖、東京海上、千代田生命、千代田火災などに貸与された。また防空措置として、終戦の年の五月に五号館、消費組合の売店、旧福澤邸、万来舎などが取りこわされている。そして五月二四－二六日の三日間の空襲によって、図書館[6]、大講堂、教職員クラブ、商工学校校舎などが消失した。

日吉は四四年二月頃から第一校舎（予科）が海軍軍令部と建設部隊に、寄宿舎は連合艦隊司令部に貸与され、豊田副武司令長官以下が駐留、その周辺の地下には七月頃から総延長二・六キロメートルに及ぶ地下施設が掘られた。日吉周辺全体では総延長五粁以上。これを約二千人が掘ったが、このうち約七百人は朝鮮人労働者で昼夜三交替で特に危険な所を掘らされた。連合艦隊の長官や幕僚は寄宿舎に入り、暗号隊と通信隊は壕内で勤務、そこからレイテ作戦、沖縄作戦、特攻隊や戦艦大和の出撃などの指令が出されたと聞くと、慶應義塾の責任ではないがあまり良い気分はしない。[7]司令部があったために戦後日吉キャンパスはアメリカ軍に接収されてしまった。

また四谷地区も、医学部の東校舎、西校舎、外来診察部、講義室、病棟、予防歯科医学研究所が空襲で焼失。四谷の建築物の六割を失ってしまった。大学以外の諸学校の損害もあり、かくて慶應義塾は、日本国内で最大の戦災校となったのである。

こうしてみると慶應義塾は、太平洋戦争を始めた軍国主義国家権力の中枢に関与したわけではないが、財界を中心に人材を送り、また大学の常として多数の若手将校を供給した。大学内部に戦争に対して消極的な学者を許

容しながらも、小泉塾長を先頭に戦争に協力、日吉に連合艦隊司令部が移ってまさに軍の一中心となったのである。その結果が塾は最大の戦災校となり、米軍に日吉を接収され、惨たんたる状況で戦後再出発せねばならなかった。

しかしまた塾は多くの大学の中で洋学を中心に発達し独立自尊を標榜した特異な学校であって、その伝統の中で教育を受けた卒業生はやはり強い個性を持つと言っても良いであろう。[8] 太平洋戦争という修羅場の中で、教員は、塾生は、塾員[9]は、学徒兵は、何を考え、どう行動したのか――そしてそのことを現在どう思っているのか――われわれはこの血塗られた四年間の戦争体験から何を学ぶのか――それを確かめるのが、半世紀を隔てた今の私たちの課題である。

(1) 小泉は塾内で学生を鼓舞激励し、また新聞などに筆を執って戦意高揚を訴えた。雑誌『現代』(一九四四年一〇月号)の一部を示すと、〝如何にして米英を撃滅すべきか。それは明白で平凡である。たゞ戦ふといふことだ。勝つ日まで戦ふということ、たゞこれのみである。智恵才覚は役に立たぬ許りか、或は却て邪魔になる。これ程の大戦争に何か奇抜な妙策があるかのやうに思ふこと、それが抑々の間違である。汗血塗炭、悪戦苦闘、これ以外に勝利の途はなく、ただ此中に勝利の途は必ず開ける。どんな新兵器があるか、どんな秘密の作戦計画があるか。そんな事は凡べて軍当局者に一任して置けば好い。〟小泉信三『戦争と道義』(私家版、一九四四年)、一七-一八ページ。〝言ふまでもないが、この戦争に中途半端な解決はあり得ない。吾々はこれを覚悟しなければならぬ。米英人は頻りに日本の絶滅を唱へてゐる。幾分の威嚇はあるかもしれぬが、私はそれを真に受ける。地を替えれば、私も必ず同じ事を唱へるであらう。〟一九四四年九月二五日『毎日新聞』、小泉、前掲書所収、二ページ。漢字は当用漢字に直してある。

(2) 今村武雄『小泉信三伝』(小泉信三先生伝紀編纂会、一九八三年)、三四二ページ。

(3) 渡辺俊一氏によれば、福澤の〝脱亜論的対外論はフランスのユエ占領の衝撃の下で書かれた「外交論」において初めて姿を現し、清仏戦争における中国の敗北による危機感から生じた「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」によって確立したものなのである。〟「フランスのベトナム侵略と福澤諭吉『脱亜論』再考」『近代日本研究』8(一九九一年)、一三九ページ。

(4) 不戦兵士の会の雑誌『不戦』一九九二年九月号には、武田逸英氏(昭和六年卒業)の「十五年戦争思潮の原型は福澤諭吉にあるのか」が掲載されている。

(5) たとえば鈴木裕子『従軍慰安婦・内鮮結婚――性の侵略・戦後責任を考える』(未来社、一九九二年)

(6) 戦中の図書館の様子については、孫田良平「戦中の学生生活、慶應義塾図書館」『三田評論』一九九二年一〇月号、拙稿「慶応義塾と社会思想（戦前）」、拙著『社会思想史断章』（日本経済評論社、一九八九年）所収。

(7) 寺田貞治「日吉台地下壕—旧海軍連合艦隊・軍令部など最高秘密地下施設の謎を追う—」『三色旗』一九九一年七月号参照。寺田氏は塾高等学校教諭（地学）、日吉台地下壕保存の会の事務局長。

(8) 安川寿之輔氏は「十五年戦争期教育体験による世代区分」という興味深い試みを行っているが、一九二〇－二五年の間に生まれた〈わだつみ世代〉の中で、慶應大学は傑出した人物を生んだとして、『きけわだつみの声』に素晴らしい文章を残して特攻攻撃で死んだ上原良司、『雲流るる果てに』に〝民主主義への正しい理解と自由への燃えるようなあこがれを切々と書いた〟宅島徳光、意図的な「落ち幹」小林完太郎、不戦兵士の会理事長の小島清文、作家の安岡章太郎の名を挙げている。安川寿之輔「十五年戦争と教育—教育の戦争責任＝戦後責任—」『不戦』一九九二年九月号参照。他の大学にこのような例はないとすると、慶應義塾の誇るべき自由主義教育の現れ、と言えるのかもしれない。

(9) 多数の塾員の中で、特殊な体験者を挙げれば、一九四〇年ソ連から中国の延安に行き岡野進の名で日本兵捕虜を教育、四二年に日本人反戦同盟を組織し、日本人民解放連盟などで活動した野坂参三氏、アメリカ共産党と関係ありとされて横浜事件で妻と共に逮捕拷問にあった川田寿氏などがいる。川田氏は戦後塾経済学部の教授となった。

〔付記〕この調査研究については、東京新聞（一九九二年一二月八日）、朝日新聞（一九九三年二月一六日）、NHK綜合テレビとラジオ（四月九日）などにおいても報道された。
本文中に詩の使用を許可された山崎有道氏、手紙の引用を許可された油田和次氏、松本武彦氏に感謝する。